

令和7年度第1回  
台東区総合教育会議  
(令和7年11月4日)

台東区総務課

○日 時 令和7年11月4日(火)午後1時00分から午後2時37分

○場 所 庁議室

○構 成 員

区	長	服部	征夫
教 育	長	佐藤	徳久
教育長職務代理者		神田	しげみ
教 育 委 員		川崎	修一
教 育 委 員		垣内	恵美子
教 育 委 員		浦井	祥子

○関 係 職 員

総 務 部 長	小川	信彦
教育委員会事務局次長	佐々木	洋人
総 務 課 長	福田	健一
庶 務 課 長	山田	安宏
指 導 課 長	宮脇	隆
教育改革担当課長 兼教育支援館長	増嶋	広曜

○日 程

- 1 区長挨拶
- 2 教育長挨拶
- 3 議 題

(1) 台東区のグローバル教育の推進について

<配布資料>

- ・次第
- ・台東区のグローバル教育の推進について
- ・台東区のグローバル教育の推進(スライド資料)

午後1時00分 開会

○福田総務課長 それでは、皆様おそろいでございますので、これより、令和7年度第1回台東区総合教育会議を開会させていただきます。

事務局を務めます、総務課長の福田でございます。どうぞよろしくお願いいたします。

恐れ入りますが、以降、着座にて失礼させていただきます。

会議に入らせていただきます前に、傍聴についてお諮りさせていただきます。本総合教育会議は、原則として公開することになっておりますので、本日提出される傍聴願につきましては許可いたしたいと存じますが、皆様いかがでございますでしょうか。

(異議なし)

○福田総務課長 ご異議がございませんので、傍聴については許可いたしたいと存じます。なお、本日の傍聴希望者でございますが、現時点では0名でございます。

なお、本会議につきましては、議事録作成のため、録音をさせていただきますので、あらかじめご了承のほど、よろしくお願いいたします。

それでは、開会にあたりまして、服部区長よりご挨拶を頂戴したいと存じます。よろしくお願いいたします。

○服部区長 本日はご多用のところ、第1回台東区総合教育会議にご出席いただきまして、誠にありがとうございます。

現在のデジタル化の進化やSNSの普及、また、地域コミュニティの在り方の変化など、子供たちを取り巻く環境が大きく変化をしています。未来を担う子供たちが学校、あるいは園で健やかに学び、充実した生活ができていますのは、本当に教育委員会をはじめ、保護者、また地域の方など、多くの皆様のお力添えがあつてのことと、心より感謝申し上げます。

本日の議題ですが、「台東区のグローバル教育の推進について」とさせていただきます。

国際社会の中で急速に変化する時代を生きる子供たちには、多様な価値観を尊重して、豊かな国際感覚を養うこと、これが大切になっていくことと思います。

本日は限られた時間でございますけれども、皆様から貴重なご意見をお伺いし、一緒に考えて参りたいと思いますので、よろしくお願いいたします。

○福田総務課長 服部区長、ありがとうございます。

続きまして、佐藤教育長よりご挨拶をお願いいたします。

○佐藤教育長 それでは、私のほうからもご挨拶を申し上げます。

今、服部区長からもございましたが、本日の議題は「台東区のグローバル教育の推進」でございます。

本区の台東区学校教育ビジョンの中でも、施策目標の1として、「新しい時代に対応する資質・能力を育成する」こと、また、施策目標2としては、「グローバルな社会で活躍

する人材を育成する」ということを掲げており、グローバル教育の推進ということで、日夜取り組んでいるところでございます。

後ほど担当のほうから話がありますけれども、区内の小中学校は、小学生の場合は、いわゆるTGG（TOKYO GLOBAL GATEWAY）での体験、それから、中学生は海外短期留学派遣等を通して、世界に飛躍し、多文化に対する理解と日本人としての自覚と誇りをもち、国際感覚が養われるよう、グローバル教育を進めているところでございます。

本日の会議・協議を通しまして、区長部局、また教育委員会の連携を一層図ってまいりたいと考えているところでございますので、本日もどうぞよろしくお願い申し上げます。

○福田総務課長 佐藤教育長、ありがとうございます。

それでは、本日の議題に入らせていただきます。議題は、お手元の次第にございますとおり、「台東区のグローバル教育の推進について」でございます。

指導課長からこの後説明がござりますが、その後に委員の皆様よりご意見等を頂戴したいと考えておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、宮脇課長、ご説明をお願いいたします。

○宮脇指導課長 それでは、台東区のグローバル教育の推進につきましてご説明を申し上げます。

指導課長の宮脇です。どうぞよろしくお願いいたします。それでは着座にてご説明させていただきます。

まず、お手元の資料、台東区のグローバル教育の推進をご覧ください。

台東区のグローバル教育の推進では、児童生徒の豊かな国際感覚を養うため、グローバル教育の一環として、主に区立中学校1・2年生の生徒を対象としたEnglish Summer Schoolや、区立小学校5・6年生を対象としたTOKYO GLOBAL GATEWAY、青海と立川にあります施設を活用した英語体験活動等を実施しております。また、区立中学校の生徒をオーストラリア連邦シドニー市及びノーザンビーチ市に派遣し、海外における生活や学習、ホームステイ等の直接体験を通して、豊かな人間性を培い、国際社会において尊敬と信頼を得ることができる区民の育成を目指すことを目的としております。

それでは資料に沿ってスライドで説明いたします。

本日ご説明をさせていただく内容は、1. グローバル教育重点指定校の設置、2. 学習成果を測定する機会の創出、3. 体験型英語学習施設での校外学習、TOKYO GLOBAL GATEWAY（TGG）でミニ留学、4. English Summer School（ESS）の実施、5. 中学生海外短期留学派遣事業の5点につきまして、順にお伝えいたします。

まず1、グローバル教育重点指定校の趣旨です。本事業の趣旨は、台東区における国際理解教育及び英語教育のさらなる充実・発展のため、本教育を推進する重点指定校を新たに設置し、生徒の国際感覚や英語におけるコミュニケーション能力の向上を図るとともに、その成果を他校へ発信し、取組の普及啓発を目指すことです。

指定校は、上野中学校、桜橋中学校です。指定期間は令和6年4月から令和8年3月までの

2年間です。

内容につきましては、中学校学習指導要領が求める授業改善の一層の推進、ALTの追加配置、豊かな国際感覚を養うための交流行事の開催、公開授業や学校ホームページ等による成果報告等を行っております。

ご覧いただいております写真は、上野中学校と桜橋中学校での授業の様子です。上野中学校は外国の方向けに旅行プランを立て、英語でプレゼンテーションを行っている場面です。桜橋中学校は、校内で研究授業を行っているときの写真です。

グローバル教育重点指定校では、学習指導要領に示されております、主体的・対話的で深い学びの実現に向け、児童・生徒が自ら課題を発見し、習得した知識等を活用して課題を解決することができる資質・能力を育成するため、授業改善を図っております。

こちらは桜橋中学校で令和7年7月1日火曜日に行われた実用英語技能検定（英検）の2次試験の対策の様子です。桜橋中学校では、グローバル教育重点指定校として、ALTの配置時数を増やしています。そのことを生かし、英語科教員や学力向上推進ティーチャーの先生方とも協力しながら、英検の2次対策を行いました。さらに、7月14日月曜日には、JICA（国際協力機構）の方2名を講師に迎え、講演をしていただきました。講演では現地の生活や体験を元に、日本と現地の違い、異文化交流や国際理解、JICAのことについて教えていただきました。

続いて、上野中学校の取組についてお伝えいたします。上野中学校では、今年度8月26日火曜日にESE（English Summer Event）を行いました。中学校3年生を対象に、1クラス1時間実施しました。1クラスに10人のALTがついて、アフリカ、東南アジア、アメリカ、ヨーロッパの方々が自国の食べ物、文化を英語で紹介したり、英語でアクティビティを行いました。資料内の写真はアクティビティの様子です。これはクイズを出し合っている様子です。全て英語で行っています。この時間は、日本語を一切使ってはいけないルールとなっています。

次に2、学習成果を測定する機会の創出です。区立中学校の3年生全生徒を対象に、実用英語技能検定3級相当の検定料1回分を補助しております。この事業は、令和6年度より開始いたしました。

次に3、体験型英語学習施設での校外学習、TOKYO GLOBAL GATEWAY、いわゆるTGGでミニ留学についてです。台東区立の小学校では児童に対して豊かな国際感覚を養うための一つとして、5・6年生を対象に行っております。TGGの施設は2か所あり、5年生は立川市にある施設、6年生は青海にある施設で活動しております。令和6年度より対象を5年生までに広げました。

TGGには、アトラクション・エリアとアクティブイマージョン・エリアがあります。アトラクション・エリアには、様々な場面を想定した部屋があります。例えば、左上はファストフードの部屋です。希望の食べ物や飲み物を注文します。右下は飛行機の機内の座席が設置された部屋です。客室乗務員とのやり取りを通して、必要なものを頼んだり、要望

を伝えたりします。レベルは初級・中級・上級の3段階であり、クラスに応じて会話のスピードや活動内容の難易度が変わります。

こちらは、大正小学校が行ったTGGにおける活動の様子です。アクティブイマージョン・エリアでの様子が映っています。アクティブイマージョン・エリアでは、「プログラミングを体験しよう」や「日本にいながら留学体験」など、様々なプログラムがあり、グループに分かれて提供されたプログラムに対して、英語を使って協力して取り組みます。こちらの写真はグループで協力して活動している様子が映っています。大正小学校では、「木星について皆で調べよう」を英語で学習しました。

続いて4、English Summer School (ESS) の実施についてです。まず、対象については、中学1・2年生を対象とし、希望生徒約40名に対して、英語体験のプログラムを行います。次に体制については、英語体験プログラム実施時は、生徒5から6名に対して、ALTを1名配置しました。そして、コースについてはAdvancedとBasicの2クラスで実施しました。夏休み期間中に、区内全中学校で行っております。

先程述べましたが、ESSには二つのコースがあります。AdvancedはCEFRのA1レベル程度（「実用英語技能検定」3級程度）の使える英語力の育成と英語活用に対する意識の向上を目指します。Basicは、日常的な話題について英語で表現したり、伝え合ったりすることができる力の育成と、英語活用に対する意識の向上を目指します。

ESSは2日間の行程で行われます。流れについてはご覧のとおりです。1日目にはAdvancedとBasicともウォーミングアップとして、自己紹介やアイスブレイクを行います。Advancedは台東区の伝統や文化を紹介するために調べ学習を、Basicは、オーストラリアのシドニー市やその周辺の地域の様子を発表するために調べ学習を行います。2日目にはそれぞれ調べたことを皆の前で発表します。

こちらは駒形中学校での活動の様子です。7月24日木曜日と25日金曜日に行われました。1日目は、講師の先生方からの自己紹介、続いて生徒からの自己紹介から始まりました。英語でのアイスブレイクや、1人1台端末で紹介したいことなどをまとめる活動等を行いました。

続いて桜橋中学校での活動の様子です。8月21日木曜日と22日金曜日に行われました。2日目は活動にも慣れ、積極的に英語でコミュニケーションを取る姿が見られました。右の写真は2日目の午後、発表の様子です。

参加人数についてです。合計をご覧ください。English Summer Schoolは令和3年度から開始し、令和5年度よりAdvancedとBasicの2コースになりました。下段の合計をご覧ください。参加人数は今年度は216名参加しており、年々増加しております。今後も周知の徹底、活動内容について精査してまいります。

最後に5、中学生海外短期留学派遣事業についてです。令和6年度より再開いたしました。

目的は、台東区立中学校におけるグローバル教育を推進するため、生徒をオーストラリア連邦シドニー市及びノーザンビーチ市に派遣し、海外における生活や学習及び相互交流

などの直接体験を通して、豊かな人間性を培い、国際社会において尊敬と信頼の得られる区民の育成を目指すことです。

派遣生徒は、区立中学校7校で第2学年、20名です。グローバル教育重点指定校の上野中学校・桜橋中学校からは5名ずつ。その他の中学校5校からは2名ずつ参加しております。なお、昨年度は77名、今年度は70名の応募がございました。引率教員は、校長を含む4名、事務局1名です。

研修日程は、事前研修がオリエンテーション・結団式を含む6月から8月の8回。事後研修が8月に3回行われます。派遣期間は8月上旬から中旬にかけて、9泊10日で行います。令和6年度は8月6日火曜日から8月15日木曜日。令和7年度は8月5日火曜日から8月14日木曜日の期間で派遣されました。

それでは、ここから結団式から解団式までの様子を、動画を作成しましたのでご覧ください。

#### (動画放映)

○宮脇指導課長 今ご覧いただいた動画については、今年、台東区のケーブルテレビに作成していただいたものです。

ここから、見ていただいた動画と重複しますが、オーストラリアでの活動の様子を改めて紹介いたします。

派遣された学校では、初日、歓迎会が行われ、派遣生徒1人につき1人のバディがつき、それぞれ自己紹介が行われました。歓迎会の後は早速バディが選択した授業に参加しました。授業は音楽、理科など、日本にある授業もありましたが、環境や演劇などの独自の授業もありました。

こちらの写真はホームステイの様子です。今回訪問しているピットウォーターハイスクールの生徒の家庭にホームステイしました。2人1組でのホームステイでした。ホームステイ先では週末にオペラハウスや動物園に連れて行ってもらった生徒もいました。

先ほども動画でありましたが、フェアウェルパーティーで披露したソーラン節は、ピットウォーターハイスクールの生徒に大好評でした。

最終日はシドニー市に戻り、各グループがあらかじめ立てた計画に沿ってグループごとにシドニー市内を視察しました。各生徒は、これまでの学習を生かし、英語でのやり取りを行っていました。

今年度は10月2日木曜日に解団式を区役所で行いました。解団式では、これまでの学習の様子を発表し、教育長をはじめ、教育委員、保護者等に学んだことを報告しました。解団式後は各校で全校集会や文化祭等の行事で海外派遣について、それぞれ発表する予定になっています。画面は、令和6年度に派遣された生徒の報告会の様子です。参加した生徒の中には、学級委員長になったり、生徒会で活躍したりして学校の中心として活躍している生徒もおります。今後も中学生海外短期留学派遣事業を通して、台東区や所属する中学校で貢献できる人材を育ててまいりたいと考えております。

最後になりましたが、台東区の事業から交流の輪が広がり、9月26日金曜日には、海外派遣でお世話になったバディの生徒と家族が日本旅行するにあたり、上野中学校を訪問するといった出来事がありました。バディの生徒は日本の学校生活を1日体験しました。

また、英語科専科教員が在籍している蔵前小学校では、外国語の授業の一環として、姉妹都市であるデンマーク王国グラズサクセ市のヴァドゴー学校と学校交流を行っております。ヴァドゴー学校からはデンマークの文化や紹介、手紙が送られております。一方、蔵前小学校からも日本のお菓子や手紙、ビデオレター等を送って交流を続けています。2022年より行っている本交流は、習った英語を使って、実際に外国の友達と心を通わせてみたいという子供たちの声から始まり、今後も続けてまいりたいと考えております。

以上で報告を終わります。今後もこのような国際交流を通じて醸成されたつながりが継続するよう、グローバル教育を推進してまいります。

○福田総務課長 宮脇課長、ありがとうございました。

それでは、教育委員の皆様からご意見・ご感想等いただければと存じます。

大変僭越ではございますがよろしければ私のほうからご指名をさせていただきます、順番にご発言を頂戴できればと思いますが、よろしいでしょうか。

それでは恐縮でございますが、浦井委員、いかがでしょうか。

○浦井委員 浦井です。よろしく願いいたします。

今の本区のグローバル教育の推進の実情などにつきまして、ご報告ありがとうございました。本区での取組など、よく分かりました。こちらの中学生海外短期留学派遣事業など、相互にこちらにもいらしてくださるという形になってきたようで、本当に好ましいことだなというふうに思います。ぜひこういった輪が、さらに広がっていくような形になっていただけたらと思うところです。

その上で、私からは少し英語教育について取り上げたいと思います。どういう観点からがよいかと悩みましたけれども、あまり触れられない「英語教育の歴史」という観点を切り口に、少しお話をさせていただきたいと思います。

グローバル教育では英語が重視されますが、当然のことながらグローバル教育と英語教育自体は別のものであります。ただ現在、英語教育というのは重要な科目として授業数も増えておりますし、様々な課題が出ておりますので、今日はそちらを取り上げていく形でいきたいと思います。

英語教育の歴史につきましては、和歌山大学の英語教育学・英語教育史の教授である江利川春雄氏が『英語と日本人——挫折と希望の二〇〇年』という本を出していらっしゃいます。ここでは表紙だけお示ししますが、ちくま新書で2023年に出たものです。

この中には、「英語と日本人の関係を抜きに日本の近現代史は描けない」という一文があります。日本人は近代以降、否が応にも英語と向き合わざるを得なくなっておまして、その葛藤というのはまさに日本の近現代史を見るに当たって重要な意味を持っているということです。この本は、英語が日本人にとってどのような意味があったのかということ、

英語教育の歴史という観点から問い直したものになっています。

また、同じく江利川氏の書籍として、『英語教育論争史』というものが出ています。講談社選書メチエで、さきほどの本の前年、2022年に出たものです。どちらかといえば、先ほどの新書のほうが読みやすいかと思うのですが、今回、江利川氏のご意見は、この二つの書籍から引用させていただいています。先に申し上げますと、この本は近年の英語教育について、本日より取り上げる内容のほかにも様々な提言をなさっていらっしゃいますが、全部取り上げられることもできませんし、教育史を歴史の授業のように語っても、ちょっと趣旨にずれてしまいますので、そちらを省かせていただいて、必要なところだけ使わせていただいております。

さて、話は戻りますが、江利川氏はこの著書の中で、日本人が英語教育を歴史や社会と切り離して論じる傾向があまりにも強いということをおっしゃっていて、そこに違和感がある、英語教育は歴史や社会と切り離してはならない、ということをおっしゃっています。

日本における英語教育の歴史を見ると、小学校をはじめとした英語教育の問題というのは、実は既に明治の初めから200年間にわたり、繰り返し繰り返し議論されてきたものです。長くなりますので具体的なことは省略しますが、例えば小学校における英語教育の是非、つまりは小学校から教えるべきか、教えないべきか。それから、教育課程での外国語の割合。そもそも英語は義務教育化すべきかどうか。さらには教授法、つまり教え方について、文法訳読（文法を教えたり訳を読んだりすること、訳させたりすること）を重視するか、読ませることを重視するか、それともコミュニケーションを重視するか。それから、そもそも何のために学ぶのか。英語は教養なのか実用なのか。この辺りのことは全て明治期から繰り返し話し合われたことでありまして、今現在にも同じことが話し合われているわけです。もちろん同じことが話し合われてきたから意味がないというわけではありません。しかし、今、この歴史を見直してみるのも、本当の英語教育の問題点や英語教育において基本的な部分を見直す、一つのきっかけになるのではないかというふうに思います。

明治期の議論の中でも、当時英語を学ぶ目的として挙げられた一つは、外国人が明治になって国内に住むようになったときに外国人とコミュニケーションを取れるようにしたいというものでした。その後、このことにつきましては外国人の居留自体が実現しませんでしたので、この目的は立ち消えになりました。しかし、既に当時から国内で外国人とのコミュニケーションが必要となる可能性が大きいということが考えられ、その上で議論があったということです。

明治末期から戦前における日本の英語界をリードした存在としまして、英語学者の岡倉由三郎がいます。彼は岡倉天心の実弟ですので、同じ岡倉に、由来の「由」で由三郎といいます。彼は今申し上げたとおり、台東区とも縁の深い岡倉天心の弟です。そして、友人には夏目漱石がいます。明治後半にヨーロッパ留学を果たしまして、日本人が英語を習得して国際性を身につけることが日本の将来につながると確信した由三郎ですが、彼の考えを受け継いだのが、戦後の英文学者の福原麟太郎です。福原は、あらゆる外国語学者は外

国の文化学者でなくてはならない。と説いています。これはまさに外国語を学ぶというのは、外国文化を学ぶと同じことであり、同じでなくてはならないのだということを主張しているわけです。

ここでは取り上げませんが、当然のことながら、この約200年の間には戦争など政治的な状況の変化もありました。「英語教育廃止論」というのも、その中で繰り返し提唱されてきたものです。英語教育の歴史の中で、この英語科廃止論を唱えた人物として国文学者でもあり、東洋大学の学長でもあった藤村作がいます。藤村自身、堂々たる英語学習歴と抜群の英語力を有していた人物です。そして、先ほど名前が出た夏目漱石が英語教育の先生でした。彼は、今放送中の朝の連続テレビ小説で取り上げられており、上野の国際子ども図書館にその像がある小泉八雲（ラフカディオ・ハーン）の授業も東大で受けています。そういった人物ですが、なんと新任英語教師だった夏目漱石をクラス総がかりで質問攻めにし、良くないことではありますが、彼の言うところによれば「とっちめてやろう」としたと。けれども漱石の明快な解釈に総負けして、以降はすっかり敬服して、課外授業まで頼み込み、漱石からシェイクスピアのオセローやハムレットを習ったというような人物です。

藤村いわく、当面の言語文章を理解し得るだけではよい語学の教師にはなれないということが分かった。せっかくアメリカの大学で学んでこられた先生でも、たとえ英語・英文学に対する学識を持っておられたとしても、自分の国、自国の言葉で、名文を書くような力を持っておられないので、その解釈がびたりと相手に来ない、とのことです。そして、英語教育には日本語や日本の知識が必要だということを言っています。

こうした藤村の発言を踏まえても、英語教育廃止論者とされる人物が、一概に英語の全てが不要だと言ってくるわけではありません。誤解を恐れずかみ砕いて言うならば、日本人にとって英語は、日常生活では使用しない学習言語ですし、ドイツ語話者が英語を学ぶ場合などと異なって、語句の順番、語順の違いというものが非常に難しいものです。そのため、習得に大きな困難がありますので、習得にあたっては強い学習の動機というものが必要になる。そして教える側も、教員のスキルや教え方というものの工夫が必要になる。と言っているわけです。これはまさに、現代の英語教育にも言えることでしょう。

先ほど書籍をご紹介した江利川春雄氏ですが、氏は、歴史や経済そして政治などの関係を断ち切って、英語教育の問題などを開始年齢や教え方、教授法の問題だけに矮小化してしまうと、問題の本質が見えなくなるというふうに述べています。そして、もう一つの問題は、日本人が英語の議論に対して、これは氏の言葉を借りれば、「とどめを刺す」という表現になりますが、結局結論をきちんと出さずに毎回先送りにする。取りあえず今はどういったやり方をしようかということだけを出して、結論を出そうとしない、というところに問題があると指摘しています。

もっともこの点については、政治学者だった丸山眞男氏が、教育改革に限ったことではなく日本人の思想的な特徴であるとしておりますので、なかなか難しい問題なのは確かです。

す。しかし少なくとも、この約200年の長い間、日本人は英語教育について繰り返し悩み、繰り返し話し合いをしたままほとんど進めずにいる。その点は、やはり認識しておくべきかなと思います。

さらに、江利川氏はこの著書の中で、現在のポストコロナ、AI時代の外国語学習について、上位層向けのグローバル人材育成策によって、ブラック企業のような、過重な過ぎたノルマが課され、子供も教師も追い詰められているということを指摘しています。かえって英語嫌いを増やすことは必須だとの警告もしています。氏も触れていらっしゃるようですが、英語の作文やレポートなどで中学・高校の生徒や大学の学生が自動翻訳ソフトなどのAIを使って英語で物を書くことが増えたと聞きます。こうしたことは程度の差はあれ、恐らく小学校でも起こっていると思うのですが、特に中学・高校では自分で作文して添削してもらうという過程を経ないので、学ぶ機会が減ってしまいます。また一方で、AIに翻訳してもらえばいいじゃないかというような発想をする子もいるわけで、今まさに「何のために英語などの外国語を学ぶのか」という根本的な問題に、改めて向き合わなければならなくなってきていると思います。

もちろん、AIによる翻訳もうまく活用すれば有益だと思います。けれども、どんなにAIで正しい言い回しに翻訳したとしても、それだけでは相手の言語を学んで使うことにより異なる言語の相手を理解する、ということまでは至らないということになります。

先ほど中学生海外短期留学派遣事業のご報告をうかがっていても、やはり実際に触れ合ってコミュニケーションを取る、そして異なる文化を体験し理解することが大切であるとよくわかります。グローバル教育の中で、この点は非常に大切な部分だと思いますので、やはりこういったことを重要視していただきたいところかなと思います。

言語とはその民族の文化や考え方を象徴しています。少々話が飛びますが、「指輪物語」と訳される「ロード・オブ・ザ・リング」の作者で有名なJ・R・R・トールキンは、その作中でエルフやドワーフなど様々な種族を描き、同時に彼らが話すエルフ語やドワーフ語といった言語とその変化を描きました。トールキンは言語学者であり、言語とはそれを使う民族の在り方、生き方や哲学、世界観などを反映していると考えていたからです。

トールキンは、言語が物語の異なる道具ではなく、多様な文化や歴史を持つ人々のいるリアルな世界を描くために、それぞれに異なる言語が必要だと考え、言語からそれぞれの種族や世界を成立させていったというわけです。

この考え方は、裏返してみるとやはり、相手の言語を理解することが相手の考え方や文化などの価値観を理解することにつながるということになると思います。

例を挙げていけば枚挙にいとまがありませんが、「もったいない」や「いただきます」「ごちそうさま」という言葉にぴったり相当する英語がないことや、逆に「Love」という言葉を「愛」と訳しますけれども、なかなかぴったりの単語がない。本来はもっと大きい意味である。夏目漱石が「月が綺麗ですね」と訳したというのは、これは資料的根拠がないのでほとんど本当かどうか怪しいところなんです、それにしてもああいった訳がよい

と言われるようなくらい、言葉はそれぞれの文化に根差し、一言では訳せない場合すらあるわけです。

そもそも夏目漱石をはじめとしまして、明治大正期の文豪たちというのは、多くが英語教師です。ちょっと挙げてみるだけでも、芥川龍之介、有島武郎、それから石川啄木、島崎藤村、坪内逍遙、そして夏目漱石と、みんな英語教師であります。もちろん生活のために教師をしている人もいましたが、英語を学び、それまでの日本文学を学び、その上で理解した上で書く、そして訳本を作るといようなことをしていました。そもそも日本になかった言葉も作り出しています。日本では、なかなかもうひとつ表せないような概念の言葉として、「セレンディピティ」という言葉を挙げます。あえて訳せば、「意図しない偶然の幸い」ということです。これはキリスト教の発想に根差しておりますが、わざわざ日本人は幸いというのを偶然か神や仏のおかげかと分けませんので、理解しにくいものとなります。そういった意味では、こういった言葉、文化もきちんと理解しながら分かっていくべきだと思います。

グローバル教育は、言うまでもなく国際的な感覚を養って相手の文化を尊重する姿勢が必要です。しかし、相手の文化を理解し、認めていくためには、自分の自身の基礎となる文化や言語がしっかり理解できていないといけません。これは難しい部分でもありまして、自分の帰属する文化だけが全てであり、完全だと思ってしまうことは決してあってはなりません。しかし、だからと言って母国語、母語もなく、自らにより立つところ、つまり自らの基礎となる文化などを大切にできない人にとって、他人が大切にする文化が理解できるわけではないのです。「グローバル化」を、世界は一つに統一されるべきという感覚で捉えているお子さんもいるようで、しかしそれは、これまで培われた文化や歴史を全て否定することになってしまいます。言うまでもなく、グローバル教育は互いの文化や存在を尊重し合える教育でなければならないわけです。

最後にまとめに入りますが、台東区は日本の中でも特に江戸時代を基盤とした歴史と伝統の息づく区です。英語を使って他国の方とコミュニケーションを取りたいと思うお子さんも多いと思います。そして、その機会に恵まれた環境がこの台東区にはあると思います。

英語教育は、これまで実用のためか、教育のためか、なかなか目的論に一致が見られなかったことが、先ほどの江利川氏などによっても指摘されています。そういう意味では、英語教育の目的とは、今、グローバル教育という視野で以前よりは明確化されているように思います。ただ、そこからさらに個人的な意欲ですとか動機というものを導き出すのはとても難しいことです。

台東区は日本の伝統や文化を身近に学びつつ、いろいろな意味でグローバルに外国の方などに触れ合う機会が持てる区ですし、他教科との連動で、日本の文化の重要性を学びつつグローバル的な視野の必要性をさらに認識していくことも、その助けとなるのではないのでしょうか。今後のグローバル教育の推進というものについて期待を込めて、これで終わりにさせていただきます。

すみません、まとまりが悪くなりましたが、長々失礼いたしました。ありがとうございました。

○福田総務課長 ありがとうございました。

それでは続きまして、垣内委員、いかがでしょうか。

○垣内委員 課長からのご説明の中で、非常に多様なプログラムを、きめ細やかに実施されていること、そしてまた生徒の方が非常に楽しんで学んでいること、最後にご紹介がありましたように、それが広がりとか人のつながりとかに結びついていること。とてもうれしく拝見いたしました。

また、海外短期留学派遣の派遣先がオーストラリア、シドニーで、私の母校のシドニー大学があるところでして、写真を拝見して、オペラハウスやベイブリッジ、いろいろ懐かしく思い出しました。

さて、このグローバル教育ですけれども、私が理解しているところではもう前の世紀から続く教育活動だと思います。先ほど200年前の話がありましたが、戦後もずっと国際化教育ということで、このときはインターナショナルライゼーションというんですかね。国際化と教育という観点で随分議論や実践がなされていましたが、グローバル教育という言葉自体は最近のものかなというふうに拝見いたしました。

どこが違うのかなと思ったところ、インターナショナルというのは国をバウンダリーとして多くの国が国際社会を構成している中での考え方でしたが、グローバルというのは、地球規模で様々な課題に直面している中で、この国のバウンダリー、ボーダーを超える様々な課題が日々の生活に直撃する、こういう現実を受けて、視野を広げるということなのかなというのが一つ思うところがあります。

あと二つ目は、今、浦井先生からご説明がありましたように、外国語教育のあり方というものを、よりプラクティカルな形に振ったかなというところがあります。

いわゆるリングフランカ、共通言語として、英語を公用語としている方が、80億人の地球全体の人口の中で15億人ぐらいか、もうちょっと。中国語が肉薄しているようなんですけれども、やはり英語の重要性と言う点も、一つ押さえておく必要があるんだろうというお考えなのかなと思いました。

グローバル教育を提唱することで、目的が広がり、そしてその外国語教育、特に英語教育、リングフランカである英語教育に集中して、小学校からも英語に触れるようにするということは、ある意味納得できる。地球規模の課題に対応して、みんなで何か克服するときには英語でのコミュニケーションがまず必要だというお考えも非常によく分かるし、小学校からの英語教育も、母語である普通言語を学ぶときは、普通は聞いて、話して、それから書いたり、読んだり、そして文法も勉強していくというのは自然な流れだと思うので、小学校で英語に触れて、そして中学校でそれを基にしながら、書いたり、読んだり、そして文法も学ぶというバランスの取れた形で、地球規模の様々な課題に果敢に挑戦できる人材を作ろうということは非常によく理解できるかなと思っております。

その上で3点ほど思うところがあります。まず一つは、浦井先生のご説明にもありましたように、前世紀のあたりで国際理解教育とか言っていたときに非常に繰り返し言われていたのは、やはり確立された自己が必要だということだったと思います。自分軸がないと他者を理解することができないというようなことは繰り返し言われていて、またアジアの一員であることを忘れてはいけなとかですね。言葉というのは、当然その広義の、非常に広い意味での文化、価値観とか、権利意識とか、宗教とか、いわゆるその狭義の文化だけじゃない様々なものが入っている。それを体現してできてきたものであるというようなこともそこでは言われてきていました。今日のグローバル教育においても、この部分を忘れてはいけなかなと思います。

その観点で、ESSで台東区の文化とか、歴史とかをきちんと学んで、それを発信することができる。英語を使ってそれを発信することができるというのもすごくいいことかなというふうに拝見いたしました。自分軸というものをきちんと持っていただくということがすごく重要なと思いました。

さらに言えば、やはり母語である国語、日本語できちんとものを考えて伝えられる資質・能力がないと、外国語、英語をなかなか習得できないと思います。これは東大の言語学の先生が会う度におっしゃることなんですけれども、やはり母語をきちんと身につけることが基礎。その母語を身につけるためには歴史や文化、伝統といったようなものもきちんと理解していないといけなということなんです。日本語の体系と、それからそこが包含する意味合いというものは、やはり非常に重要なんだろうというふうに思います。英語を学ぶことも大事なんですけれども、学習時間は無制限ではないので、限られた時間の中でうまくバランスを取っていただけるといいなと思います。コラボレーションというのものもあるかもしれません。

2点目は外国語の習得の場合、自然な流れとして読む、話す、聞くということがあっていいんですけど、やっぱり読む・書くも必要ですし、ツールとして使おうと思えば、当然その構成というんですかね。文法はやはり知らなきゃいけないと思います。これまでの英語教育の反省としては、何か文法ばかりやっていてしゃべれないじゃないかみたいなことが言われているように思われますが、私が見るところ、やはり文法をきちんと理解していて、読んで書ける人は、ちょっと慣れれば話せますし、聞くこともできる。やはり四技能バランスよく習得して、基礎をつくるのが大切だと思います。義務教育ですから、基礎をつくっていただいて、必要な時期が来たときに、その基礎の上に自分の英語力を積み上げていける、そういう形で、特に中学校は義務教育の最後の段階ですので、文法の習得も大事だということもちょっとリマインドしておきたいかなと思いました。

あと3点目が、短期留学。これはやはり遠くに行くのでお金もかかります。10日間ということで、人数も限られている。一方で、台東区の場合、私が承知している限りでは、なかなか所得とか経済的な理由で体験格差も心配されるような方も中にはいらっしゃるというふうにも聞いております。能力面や経済面など条件が整った方に様々な機会を与え

るというのもすごくいいことだとは思いますが、そうではない方にもご配慮いただきたい。例えば英検助成ですが、これは希望される方全員に補助されるということなので、こういう機会を提供することは、将来を担う、これから伸び盛りの子供たちにチャンスを与えるという点でも素晴らしい取組だと思いますし、今後の課題としてやっていただければなというふうに思います。

最後に、英語で仕事ができ、かつ自分のことも説明でき、相手のことも聞ける、そういうグローバル人材をぜひ育てていっていただきたいなと思います。

私の大学は留学生さんたちも多く、英語で指導もしましたが、実態から言うと、クイーンズイングリッシュとか、キングズイングリッシュとか、あるいはアメリカイングリッシュですとか、英語にもたくさんのダイアレクトがあります。私が学んだオーストラリアはものすごい訛った英語なんですけれども、それぞれの国で特色がある。アジアの人たちもシングリッシュといって、シンガポール系の方の英語って、語順まで中国語っぽくなっていたり、それからフランスの方とよく話すんですけど、「H」が消えるんです。北海道は「おっかいどう」に、ハローキティが「エロウキティ」になっちゃうんですが、堂々とお話になります。つまり、日本人訛りの英語でも全然問題ない。基礎・基本のところさえできれば、最低限のコミュニケーションは取れると個人的には思っています。

すごく期待いたしておりますので、ぜひ進めていただければと思います。

以上です。

○福田総務課長 ありがとうございます。

続きまして、川崎委員、いかがでしょうか。

○川崎委員 今日はグローバル教育の推進のお話をありがとうございました。よく分かりました。また桜橋中学校をみなさんと見せていただいて、子供たちが熱心に学んでいるところを見させていただきまして、ありがとうございます。

今日話そうと思ったことを、もう2人に大分話していただいたので、大学の現場で英語教育がどうなっているか、そうすべきかという議論が活発でして、その話だけ少ししてみようかなと思います。

今いろんなお話が出ましたが、今大学の教育現場で何が一番問題になっているかといえばAIです。AIを活用して英作文ができてしまうし、なんならもう学習もAIでやっている話もあります。建築学会などでも海外の建築家を呼んだときに同時通訳を頼むのですが、その同時通訳の先生が言っていたのは、もう仕事なくなりますと。もうナノ秒で同時通訳できる状況に今なっていますということで、私たちの仕事はもしかしたらなくなるかもしれないみたいなことを言っていました。

ただやっぱり、これはお2人の話にもあったように、それぞれの自己の核というか、パーソナリティもそうですしナショナリズムもそうですけれども、自国のことを知っているということは、やはり意思を伝えるためにはとても重要で、実は英語学習の裏に必要なのは、国語、それから歴史の認識ということだと思います。今、大学の一般教養のカリキュ

ラムをどうするかと、議論しています。もちろん規定があるので、第一外国語・第二外国語でそれぞれ1年生、2年生のリベラルアーツでやらなきゃいけないんですけども、それに付随して、文化の授業がすごく増えているということがあります。

そういう時代の中で、今、この中学生の子供たちはこれから育っていくので、もうAIは大学の現場では否定できないという状況になっています。すでに活用していきましょうという話になっています。ですから、その辺も踏まえてこれからグローバル教育を推進していかなくちゃいけない時代に入っていきます。その中で今言った歴史認識、それから自己の確立、それから国語力。今大学生で英語より問題になっているのは、やっぱり文章が書けないということなんです。だから今1年生で400字程度のエッセイを書かせる。毎週書かせるみたいなことからやっています。大学のレベルにもよりますが、そういうことも議論になっています。

お2人の話に少し共通していますが、自国の文化を理解した上で、それを話せるということが重要になっていくと思います。それと、今日見せていただいた動画で20人の中学生が留学に行っています。知っている子も何人か出てきました。みんな利発ですよ。ここに出てくる子は利発で。実は英語で重要なところだと、そのコミュニケーション力も重要ですけども、やはり書く・読むというのが非常に重要な部分でもあって。ここに参加しないような子が、何と言うんですかね、こういうふうなコミュニケーションはちょっと苦手ですけども、実は書く・読むがすごく好きなんだ。文学を読むのが好きなんだとか、書くのが好きなんだという子を拾い上げてほしいというのが一つ要望としてあります。

その観点で、今日見せていただいたグローバル教育、台東区のグローバル教育について、要望というか意見を言わせてください。何点かあります。

まず、ALTの選定基準ですけども、その質とかレベルというのが重要になると思いますので、その辺の選定基準というものを少し見える化していただきたいということと、あとは推進校が今2校、上野中学校と桜橋中学校が3月で2年経過すると思います。CEFRの基準でいうとA1を目指すということだったのですが、A1は中学卒業レベル。英検で言うと3級ぐらいだと思うので、目標としてはA2ぐらいを推進校は目指して、ただ、CEFR自体は確か認定基準の試験がないので、2級か準2級ってあったのかな、準2級があるのかな。ちょっと上を目指すというのを、推進校では目標にされたらいいのかなというように思いました。それから、これは前回の教育委員会の定例会でも発言しましたが、留学のプログラムの増員をぜひ。これはやっぱり20人、もったいないですね。多分、各校5人にしても35人だと思うので、できれば子供に予算をつけていただきたいと思います。多分いろいろな理由があって、連れて行く教員の人員の確保の問題とか、あったと思いますが、それもぜひ検討していきたいと思います。

それらをまとめて、Advancedコースにいる子、それから例えばA2レベルを目指してもらおう子というのは、トップランナーになってもらおうんだと思うんですね。やっぱりトップランナーがいると、今日の意見でも先輩が行ったのを見て行きたくなったという子がいたの

で、引き上げてくれると思います。

よって、トップランナーに対する手当と、それからもう一つはBasicの部分で、サマーセミナーを通してやる、ボトムアップの部分ですね。全体的な底上げの部分の両面を少し検討していただくと、台東区の子供たちがよりグローバルに羽ばたいていってくれるのではないかなと思いました。

以上です。

○福田総務課長 ありがとうございます。

続きまして、神田委員、いかがでしょうか。

○神田委員 よろしく申し上げます。

今日はありがとうございます。大変分かりやすく、取組の内容が理解できました。台東区は上野・浅草をはじめとして、国際都市としての役割を果たしている、こういう場所であるからこそ、このグローバル教育の推進というのが、大変重要な課題になり、また力になっていくのかなと感じました。今日の発表で、動画の中のインタビューはすばらしかったですよね。子供たちの話を聞いたら私も行きたくなりました。この経験が子供たちの意欲につながり、そして何年後かには、世界で活躍する人材になっていくと思いますと、本当にすばらしい取組だと思いました。

今日の発表でも感じましたが、重点校を設置した上で、成果をきちんと測定をすることが大切だということです。取り組んだからには、目に見えるような成果を出して、次につなげていくことが必要だと思いました。

オーストラリアの海外派遣短期留学は事前の準備が大変きめ細やかだということが改めて感じられました。英語のレッスン、現地でのやり取りなど、行きたい気持ちがどんどん高まっていくような工夫がみられました。多くの生徒さんに体験させてあげたいすばらしい取組だと思いました。

English Summer Schoolの実施について大変具体的に発表されました。グローバル教育を考える上では何を指すのかという目的、どのように育てるかという教育方法、次につなげていくための評価が大切なかなと思います。

グローバル教育の目的としては、英語教育だけではなく多様性の理解と尊重、国際的な視野、ともに生きる力、そしてアイデンティティの確立といったところがあると思います。

今、学校では、多様性がキーワードになっております。この多様性には様々なことが含まれているのですが、その一つに外国人のお子さんが学校にたくさん入ってきていることがあります。そういった意味でも言語、文学、宗教、価値感などいろいろな違いを学んで、それを認め合うという教育が、小学校から行われていると思います。

世界規模でやる教育では、一人一人が自分事として考えていくということが大事だと思います。また、異なる背景の人と協力し合って協働的な学びで解決していく力も大切かと思っています。

この発表では、日本の文化や台東区の地域性を発信する姿がありましたけれども、これ

も大切な力かと思えます。この力を育てるためには、英語だけじゃなく、国語で自分の考えを持ち伝える力が必要だと私も考えています。そのほか、コミュニケーション能力や調整力も必要であり、地球規模の課題についてはチームで取り組んでいくという力も必要かと思えます。共感力、倫理観など、違いを受け入れて理解するために様々な力が必要だと思えます。

私は英語が苦手だったもので、生まれ変わったら英語をもっと勉強して、海外で活躍できるような人材になりたいな思うんですけど、これからの子供たちは、本当に英語を学ぶ必要があります。翻訳機があってもやっぱり顔を合わせての人と人の触れ合いが大切だと思います。英語を学ぶ機会を、様々なチャンスで取り組んで欲しいと思いました。

今日の発表は、実際に行った具体的な取組が多かったこと、どんな成果があったか、どんなことにつながったのかということが明確になっていて、素晴らしいと思っています。

このような体験がきっかけで、子供たちの今後の姿が変わっていくということが大事だと考えています。また、教科との関連づけ、日々の英語の授業、他教科の授業、様々なことに関連づけていくことも大切かと思えます。教科横断型の学習を行うことも大切です。例えば、社会科で国際理解をして、英語での交流活動を行った上で、国語で表現すること。また、異文化を表現したものを読み取り、自分の考えを述べること。探究活動では、SDGsや、地域・世界の課題について学んでいく中で、視野を広げていくということもできます。

ICT、オンラインの活用などは、今日の発表にも豊富にありました。海外の学校や生徒との交流もあったということで、このような取組はぜひほかの学校にも広げてほしいと思います。ESSの成果ですけれども、参加する児童がすごく増えてきたというのがありました。このように数字を見ても分かりますが意欲につながっているということは、大変嬉しく思います。

最後に留意点を考えていきます。もちろん英語イコールグローバルということではないことを子供たちも理解していることではと思いますが、英語は伝える手段として大切なもの、その上で英語教育の意義を理解し、充実に力を入れるべきだと思っています。

交流をしたことでこれからどんなふう子供たちが変わっていくかを、追跡してもらえるとうれしいです。先ほど川崎委員の話にもありましたように、トップランナーとして、頑張っ学校を引っ張っていくような生徒会活動などいろんなことに挑戦していく子、苦手だった英語が嫌だと思った子が、ちょっと英語を学んでみようかなというふうになるなど期待も大きいです。

川崎委員からたくさん的人数の子供たちがオーストラリアに行けるよという話がありました。面接や活動内容を考えると、優秀なお子さんが選ばれるとは思っています。そのうえで、視点を変えた選考もあってもいいのかなと思いました。Basicの子供たちを取り上げる部分も多少あっていいのかなという気もしました。

また拠点校の役割ということを確認にして、早めに他校に広げてほしいです。グローバル校に行きたいという子供たちの選択性もあるので、いろんな学校にも広げていけるよう

な配慮もぜひお願いしたいと思います。

最後に、グローバル教育というのは、授業の充実、そして学力の向上に結びつくということが大切かと思っています。英検の成果とか学力テストの成果はどうだったのでしょうか。その辺も聞きたかったです。加えて、小学校の英語教育の充実も必要かと思っています。今日、多少紹介がありましたのでよかったですと思います。幼小中連携活動を本区はやっていますから、そういった機会に、このような取組を広げていくことも必要かと感じました。

他校の生徒さんたちも、この動画を見てもらえれば応募も増えると思います。

今日は大変充実した発表を聞かせていただきましてありがとうございました。

○福田総務課長 ありがとうございます。

それでは、佐藤教育長、お願いいたします。

○佐藤教育長 これまで各委員から様々なご意見をいただき、また、グローバル教育の取組についての要望までいただきましてありがとうございました。真摯に受け止めて、どうするかを、教育委員全員と、教育委員会の中で考えていきたいと思っています。

私のほうはちょっと視点を変えて、これだけAIが、先ほど浦井委員とか川崎委員もおっしゃっていましたが、AIの技術がこうやって飛躍的に発展して、高度な翻訳機が可能になって、手元にぶら下げれば幾らでも英語がしゃべれるとか、そうした場合に、このAI時代に外国語を学ぶ意義を改めて考える必要もあるんじゃないかなと思っています。

国のほうは、2030年からの新しい学習指導要領を目指して、中央教育審議会の中でもいろいろな議論をされているということで、特にこの文部科学省から中央教育審議会への、外国語についてのある諮問文があります。外国語教育についてということで、小学校高学年の外国語を導入するなど、小学校から高校まで大幅に充実された中、生成AIの活用を含め、今後の在り方をどのように考えるか。また、手軽に質の高い翻訳機も可能となる中、外国語を学ぶ意義をどのように考えるかというのが国のほうで議論されて、主要な論点になっています。今、外国語のワーキンググループでも議論をされているというふうに聞いておりますので、こうした手軽に質の高い翻訳機が可能となっていますが、外国語を学ぶ意義として、AIでは代替できない重要な要素があるんじゃないかなと私は思っています。

まず一つは、各教育委員から話がありましたが、異文化の理解の深化ということで、言語はその文化を反映しております。そして、その言葉、外国語の背後にはその国の歴史や文化、価値観が息づいていると。外国語を学ぶことによって、他の文化・社会への理解が深まり、また多様性を受け入れる力が養われるんじゃないかなと思います。国際的な視点を持つ大人に成長する。子供たちにとっては大変重要なことだと思います。

また二つ目は、実際のコミュニケーション能力の向上だと思います。言葉はコミュニケーションのツールですけれども、例えば相手と直接対話する中で、自己表現力やまた英語を通して多様な他者との違いが分かり、他者への理解が当然育まれるんじゃないかなと思います。これはAIの翻訳では得られない、我々人間しかできない特性じゃないかなと思います。

それから三つ目、外国語を学ぶ過程そのものが自己の成長、子供たちの成長の機会であるんじゃないかと思います。学ぶ過程で、子供たちが思考力・問題解決能力を養い、またAIが迅速に情報を提供できる時代だからこそ、主体的に自ら考え、学ぶことの重要性もぜひ子供たちに理解をしてもらおうということが、意義があることなんじゃないかなと思っております。

ただ一方で、このAI技術の進展は、私たち教育に大きな可能性ももたらしております。国のほうで言っている生成AIを含むデジタル基盤の活用という視点から言えば、例えば、あらかじめAIに組み込まれた英語学習のアプリを使った授業では、生徒の言語活動の発話量、アウトプットですね。アウトプットが数倍に増えたという、ある学校の実証授業の結果も出されていると聞いております。ただ、これを授業の中でどう教職員の皆さんが使っていくかということになると、授業そのもののデザイン力を高めていくことも必要になっていく。教職員の資質能力の向上も必要になってくるのではないかと思います。

それから、先ほど神田委員からありましたが、幼小中の連携ということ言えば、小学校の外国語は、外国語活動から中学校における教科英語の連続性、これも非常に重要なポイントだと思っています。小学校での基礎的な英語能力が、中学校でのさらなる発展につながることを確実にするためには、一貫したカリキュラムの構築が必要じゃないかと思っています。このプロセスにおいて、教職員間の連携、情報共有は欠かせないだろうと思います。

教職員の研究会である台東区教育研究会の中では、小学校外国語部と中学校英語部で、令和6年度からなんですけど小中連携による外国語活動を推進しております。6年度は小学校外国語部が中学校の英語部会研究授業協議に参加する機会がありました。小学校外国語部会が中学校の英語の授業の参観や協議会を通じて、小学校外国語の外国語活動を小学校の先生たちが行うに当たり非常に参考になったという報告もされています。これをきっかけに中学校英語部会との連携もぜひ深めていきたいといった声も聞いております。

7年度については、中学校英語部会に小学校外国語の教諭が参加したとも聞いております。

今後、台東区独自の一貫したカリキュラム「台東イングリッシュ」、この成果物が作成されると聞いておりますので、私としては大いに期待をしているところでございます。

AI時代の外国語教育は、テクノロジーを活用しつつも、子供たちのコミュニケーション能力の向上、そして子供たちが国際感覚を持ち、多文化を理解して、自らのアイデンティティを大切にしながらも、他者を尊重することができるように成長する、これを重視することが肝要だと思っています。そのためにも、今日発表したグローバル教育を推進し、子供たちが未来の多様な社会でも活躍できるようにしてまいりたいと思っています。

私からは以上です。

○福田総務課長 ありがとうございます。

それでは、様々なご意見をいただいておりますが、最後に服部区長、ご発言をお願いで

きればと存じます。

○服部区長 今日とは台東区のグローバル教育の推進というテーマで、各委員の皆様から大変示唆に富んだ、また貴重なご意見をいただき、本当にありがとうございます。

先ほど指導課長からご説明いただいた中身について、お話をさせていただければと思いますが、各委員からも非常にいい取組をされているとお話がありました。そして、そういったことをいろんなホームページや様々な分野で公開をしている。こういうことは非常にいいことだと思います。また、先ほど神田委員からESSの参加人員についてお話をいただきました。令和5年度で112名、それが令和7年は216名で、大幅に増えたのは、これまでの教育委員会が取り組んできた国際理解教育、その成果の表れではないかと思ひますし、それがまた英検の取得にもつながっていくのではないかと思ひます。

さらに、ESSの学習の中で、Advancedですが、国際理解を深めるために台東区の伝統文化について調べたり、情報を整理して発表の準備をされている。そのようなときには、台東区の歴史文化テキスト、これは非常によく編集されておりまして、台東区の歴史が、これを見れば非常に伝統文化というものが理解できる。これは副読本で今使っていただいていると思うのですが、このようなこともずっと続けていただいで、海外に行く、あるいは海外との交流をする上で、これは非常に役に立つといひますか、台東区にはこのような世界に誇る文化資源があるということが理解できますので活用していただきたいと思ひます。台東区の歴史・伝統・文化を学んでいくことによって海外の人と交流するときに、よく海外の人は自分の国のこと、あるいは自分の文化のことを本当にもう目を輝かせてお話しされます。台東区もそれだけ誇るものがあるので、そのようなことを話せるような、そのための知識といひますか、それがまた郷土愛にもつながっていくものだと思ひています。

2点目ですが、広がるつながりというのが先ほどの映像でありました。この間、グラスサックセ、これは台東区と姉妹友好都市を結んでいるのですが、ちょうどコペンハーゲンのすぐ近くの都市で、私もそちらを訪問したこともあります。そこのグラスサックセのヴァドゴー学校ですが、その児童の交流の写真がありました。

ちょうど今年の4月ですが、グラスサックセの市長さん、それから市議会議員さんが台東区を、ちょうど25周年記念ということでお越しになったのです。本会議場でいろいろお話をさせていただいたり、それから様々な意見交換などもさせていただきました。主にテーマはSDGs。これはグラスサックセは非常に積極的に取り組まれていまして、これは台東区と共通するテーマですから、そのことについていろいろお話をさせていただいたりした中で、この映像を見ていただきました。蔵前小学校はグラスサックセの学校とこのような交流をオンラインでされた。これは向こうはドイツ語圏ですから、共通の英語での約束をオンラインでされたようですけれども、両都市の児童が、多文化の共生教育を進めている。映像を見て、グラスサックセの市長さんをはじめ、このようなことを台東区は取組んでいる。そしてまた子供たちにとっても非常にいいことだということに感銘を受けられたということは、本当に私も印象的に思ひています。

グローバル教育というのは、言語の習得だけではなくて、やはり自分の国や、あるいは地域の伝統や文化、その理解を深めて、多様性、多文化共生を目指すところにある。そのように私は思っています。

台東区は、国際観光都市で、様々なところを多くの外国の方が見えています。昨年の数字ですが、インバウンドが日本国内に非常に増えてきて、台東区に来るインバウンドも650万人という方々が、今雷門や上野、谷中等へ来ており、そのようなところでもいろいろ国際交流というのは図れると思います。また、先ほどグラズサックセについてお話ししたけれども、オーストリアのウィーン、ここも提携しており、台東区としては交流をしています。ウィーンとも、もう随分と長く、40年近くになりますが、交流を進めています。

また、台東区は国際観光都市で、私が区長になってから随分海外の方にご案内をしています。例えば浅草の流鏝馬を見ていただこうと、各国の大公使館にお話をしたら、非常にこれが皆さん関心がありまして、流鏝馬という伝統行事に。これを通して、いろいろな海外の方が見えていただいて、今、流鏝馬という鎌倉も有名ですが、海外では浅草流鏝馬がかなり有名になっています。

同様に、隅田川の花火大会へ約20か国の大公使を今年ご招待しました。そこでも日本の花火というのは本当に素晴らしいということをお話されて、やはりこの台東区の伝統とか文化というのを、海外の方に本当に肌で知っていただく、そういう取組もしています。こうした児童・生徒のグローバル教育も、土壌がある台東区ですから、子供たちが入りやすいような環境を作っていく必要もあると思います。また、グローバル教育というのは教育委員会だけということではなくて、もちろん台東区では、都市交流課、環境課、それから人権・多様性推進課があります。そのようなところとも連携を図りながら、このグローバル教育をさらに推進されることを私としては期待をしています。

○福田総務課長 服部区長、ありがとうございます。

それでは、その他、何か全体を通しましてご意見、ご発言等はいかがでしょう。

よろしゅうございますでしょうか。

(なし)

○福田総務課長 それでは、本日は数々の貴重なご意見をいただきまして、誠にありがとうございました。

これをもちまして、令和7年度第1回台東区総合教育会議を閉会とさせていただきますと存じます。

本日は誠にありがとうございました。

午後 2時37分 閉会